



舞台の配置や照明にはじまり、譜面台の高さや角度まで調整し、演奏家が音楽にだけ集中できる環境を整えるのが、ステージマネジャーをはじめとする舞台スタッフたち

だ。青い海と森の音楽祭でも、彼らの工夫と挑戦が、感動的な演奏を舞台裏から支えていた。現場の総指揮を執っていたのは、ステージマネジャーの猪狩光弘さん。

③ 舞台裏の主役たち

工夫と挑戦 演奏支える



2001年から19年までクラシックの殿堂として知られるサントリーホール専属の第3代ステージマネジャーとして数々の名演を支えてきた。現在はフリーとして活動し、訪れる現場ごとに初対面のスタッフたちと協力しながら、演奏会を成功に導いている。

室内楽演奏会の初日を前日に控えた7月2日。会場の東奥日報新町Newsホールでは、業者の手によって舞台の設営が行われていた。猪狩さん



と隠岐彩夏さんは、照明について入念に打ち合わせをしていた。「もう少し明るさがある」と猪狩さん。当

初の照明プランでは天井のスポットライト2種類で対応する予定だった

が、実際に試してみると思ったほどの明るさが得られなかった。隠岐さんは共演するハープ奏者・吉野直子さんと都内で行った事前リハーサルで、吉野さんの手元や表情の美しさに心を打たれ、それを観客にも伝えたいと考えていた。

「下から照らしてみようか」と猪狩さんが提案。だが、そのためには追加のライトが必要だった。どうするべきかと悩んでいた時、「ライトありますよ。試してみますか」と、舞台を作っていた作業員が声をかけてくれた。

迎えた演奏会当日。吉野さんが着座すると、白い壁に彼女とハープのシルエットが美しく浮かび上がった。想像を上回る幻想的な雰囲気が生まれ、演奏を引き立てた。

また、同月5日の0歳からのファミリーコンサート本番直前には、音響の調整を求められる場面があった。その時も、会場のリンクステーション

「普段なら『難しいです』で終わってしまうことが多いけど、今回はどんな場面でも挑戦しようという気持ちが現場にあふれていた」と猪狩さんは振り返る。「手作り感っていうのかな、みんなで作っているという雰囲気があった。こんなにワクワクする現場は久しぶりですよ」

(写真中央)

(加藤桃子)